返點の沿革

小林芳規

一　緒言

日本語と支那語との相違の大きな一つに語序の違いがある。漢文の訓讀では、支那語の語序を原文のままにしておいて日本語をこれに對應させる方法として、返讀が工夫されてきた。返讀は、支那語の語序に逆行して下の漢字から上の漢字に返って訓讀する方法である。返讀を明らかにすることは、漢文の訓讀においては、句讀を定めることと並んで最初の基本的な作業であるから、その起源は、訓讀の創案の時にあったであろう。

漢文の書寫された字面に直接に訓點を加之施して、訓讀を書き記すことは奈良時代末から見られる。返讀の働きを、特定の符號を以て明らかに記すことも、既にこの時に行われている。返讀の働きを書き記した符號を、返點という。

返點の、現存する最古の使用例は、大東急記念文庫蔵華嚴刊定記の延暦七年（七八八）朱點である。[注1] この文献は、訓點資料としても現存する最古のものである。この訓點資料の返點は、筆者の調査によれば、

○非自然勝性等起相緣故不起即顯還滅・

○次我今下顯對萬身己

○二者因彼樂乘便爲說一切諸法本來寂靜不生不滅・

のように句讀點と共に、[注2] 漢數字が返讀を示す返點として用いられ、漢字の右傍、時に左傍の中程の位置に書き施されている。その符號には「四」を表すのに、漢數字の「四」も用いるが、その他に「三」も併せ用いている。その漢數字の返點は、下から上に返り讀むという返讀を示すだけでなく、漢文の語順のままに上から下に訓下す「彼樂」のような、訓讀の順序をも示す働きをも含んで

いる。

又、醍醐寺蔵（一四六函ノ三號）梵網經巻上は平安極初頭期の白點と朱點とある訓點資料であって、遠藤嘉基博士が發見され、その加點時期を景雲書寫の兩毗奈耶の頃とされたものであるが、句讀點[注3]と共に、漢數字による返點が用いられている。

○一切行我皆得入生入佛家坐佛地。（萬葉假名と返點・句點は白點）

この訓點資料には、未だヲコト點が使用されていないことは華嚴刊定記の場合と同じであるが、華嚴刊定記には現れなかった假名が萬葉假名本位で加點されている。

これらの原初期の訓點資料に用いられた返點を、今日の漢文訓讀で使用している返點と比較すると、共通する所もあるが、相違點も少なくない。先ず、今日の返點はその符號として「レ」（レ點）、「一・二・三……」、「上・中・下」、「甲・乙・丙……」、「天・地・人」があり、返讀の働きに應じて使い分けられている。即ち、漢字一字の返讀にはレ點が使われ、二字以上の返讀には、初めに「一・二・三……」等の漢數字を用い、これを挾んで二重の長い返讀には「上・中・下」等の文字を用い、更には「甲・乙・丙……」や「天・地・人」をも併用している。次に、漢文の語順のままに下に訓下す時には返點は付けずに、漢文の語順に逆行して下から上に讀み返る時には必ず、どれかの返點を付ける。又、返點の位置はすべて漢字の下左寄りであって、そこに本文の漢字よりも小字で書入れるのが普通である。

これに對して、原初期の訓點資料に用いられた返點は、レ點も文字の返點もなく、漢數字の返點はあるがその使い方に相違があり、位置も異なっている。このような相違は返點が歴史的に変遷したことに基く結果であると予想される。返讀の働きそのものは古今を通じて變らなかったのに、それを書き表す返點そのものが、形態や使い方や位置を變えた、とすれば、その變改は全く個々ばらばらで把えようのないものであったのか、或いは時期を劃して、それぞれの時期には共通の形態や使い方があったのか、どうか。後者であるとすれば、時期を劃して變遷して行く原理は何であるのか。ということが問われねばならない。これを解明することは、原初期の訓點資料の返點と今日の漢文訓讀に用いる返點との間の實態を明らかにして兩者を関係づけることになり、又、現行の返

點の源を探究することにもなると考える。

從來、返點については、個々の訓點資料の假名字體やヲコト點に關聯して言及されることが多く、春日政治博士・中田祝夫博士を始め諸氏の諸報告に、當該資料の返點の實態を知ることができるのであるが、返點そのものを直接に考察することを課題とした論考は少なく、次の、

1　足利衍述「返點」（『鎌倉室町時代之儒教』所收、昭和十年刊）

2　大坪併治「反點の發達」（『訓點語の研究』所收、昭和三十六年刊）

が、筆者の知る主要なものである。この他、

3　遠藤嘉基「訓點資料の實態」（『訓點資料と訓點語の研究』の中、昭和二十七年刊）

4　小林芳規「研究資料の整理と檢討」（『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓讀の國語史的研究』の中、昭和四十二年刊）

5　築島　裕「文字」の中、「返讀符」（『平安時代語新論』の中、昭和四十四年刊）

にも返點についての言及がある。この中、1は、鎌倉室町時代の漢籍における使用の實態を説いており、就中、雁點の使用狀況に觸れている。2は、平安初期の訓點資料における反點の實態を形態面を主として詳述している。しかし、歷史的變遷という視點に立って、原初期から今日に亘って、返點の沿革を説いた論考を、筆者は未だ知らず、まして、變遷の原理に觸れた考察も未だ見られない。

本稿は、平安初期以降室町時代に至る諸訓點資料の調査し得たものを整理して、第一に、返點が大きく時期を劃して變容する樣相を押え、第二に、それぞれの時期における使用の實態を説き、これが系統による差を示すことを明らかにし、第三に、特に雁點の成立事情とその因由を推考し、第四に、これらの諸符號の變遷を統一的に把えて、原理を見出そうとし、これを、國語表記史上の問題として位置づけようと試みたものである。

返點の沿革を考察する方法としては、

(一)　返點の形態

(二)　返讀に對する返點の機能

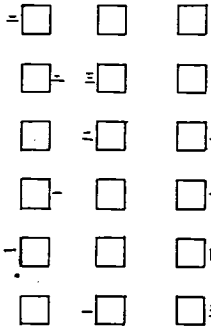
の二方面からすることが有効であると考えられる。

一、返點の形態

返點は、その形態の上から、大きく次の五つに分類す

ることができる。[注4]

A. 星點の返點



「・」點を返讀すべき最初の漢字に施すもので、その位置は漢字の左下（イの例）が普通であるが、古くは右下のこともある（ロの例）。待點というのは（ハの例）、下からの返讀を中繼して更に上方の漢字に返ることを示す。

平安初期から見られ、ヲコト點の用いられた時期の平安時代に主として用いられる。

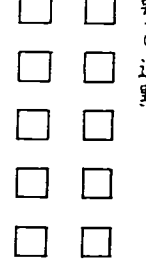
B. 漢數字の返點

漢數字の「一・二・三……」を返讀の順序に從ってその漢字に施すもので、その位置は古くは右傍（イの例）に施し、後は左傍（ロの例）に施すのが普通である。左右に施すこともある（ハの例）。漢數字は返讀だけでなく、語順のまま訓下す場合をも含んで示すのに用いられることがある。又、「四」を表すのに「三」（ホの例）や「∵」（ヘの例）を用いる等もあり、その働きは「一・二・三」に續けてこれと同樣である所から、漢數字の返點に含めて扱う。「一」の位置に「・」が用いられる（ニの例）こともある。

奈良時代末期から見られ、今日に至っても用いられるが、その施す位置には、時代による異なりがある。

C. 文字の返點

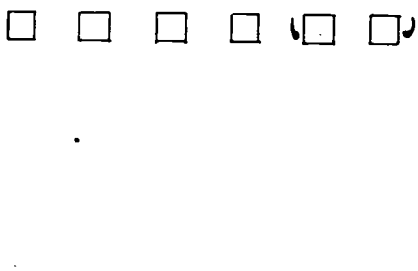
ハ、



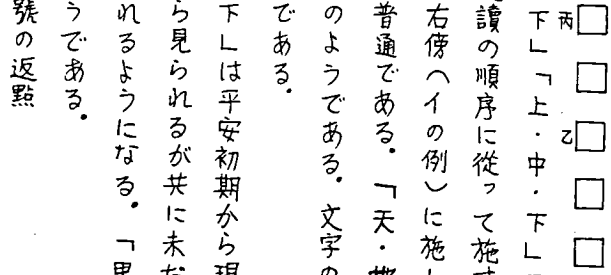
「上・下」「上・中・下」又は「甲・乙・丙……」等の文字を返讀の順序に從って施すもので、その位置は古くは漢字の右傍（イの例）に施し、後は左傍（ロの例）に施すのが普通である。「天・地・人」を用いるのは、新しいことのようである。文字の返點は長い返讀に用いるのが普通である。

「上・下」は平安初期から現れ、「上・中・下」は平安中期から見られるが共に未だ稀であって、後半期以降に盛用されるようになる。「甲・乙・丙」は鎌倉時代より後のようである。

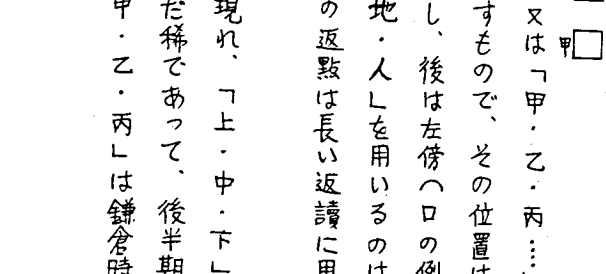
D. 記號の返點



ヘ、



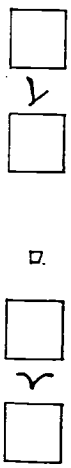
ト、



「レ」「一 レ」「＋……＋」等のように、イからトまでの記號をそれぞれ返讀に用いるものであって、イは返讀すべき最初の漢字に施し、右傍にも左傍にも施す。ロからヘまでは、返讀すべき最初の漢字とこれを受けて返る相手の漢字の方にも施すもので、位置は右傍が普通であるが左傍に施すこともある。ロからヘまでの返點は、長い返讀に用いるのが普通である。トは一字の返讀に用いるもので、上字と下字の空間の右傍にも左傍にも施す。

記號の返點が用いられたのは主に平安初期である。イだけは平安中期の前半期まで、一部に保存された。トの一字の返點は、管見では東大寺誦文の一資料にだけ見られるものであって、平安初期にも平安中期以降も他に例を知らないものである。

E. 雁點



ハ、□レ□　　ニ、□レ□

「かりがね（雁）點」というのは、ロが雁の羽を擡げて飛ぶ時の形に似ている所からこの名がある。一字の返讀を示すのに用いる返點であって、その位置は上字と下字との空間にあるが、時代によって中央から次第に左寄りとなり、形態にも小異が生じた。

院政末期に現れ、鎌倉時代以降は盛んに用いられ、位置や形態を變えながら今日に至る。今日レ點と呼ぶものに當る。雁點は、D記號の返點の中、トの返點と一字返讀の機能を擔うという點で相似ているが、形態や歴史的事情や成立事情が全く異なるものである。

二、返讀に對する返點の機能

支那語と日本語とで語順の異なる所は、訓讀をする限り、返讀が行われる。その返讀に對して逐一返點を書き施すことは、現行の漢文訓讀では普通のことである。現行では、返讀と返點とは一々が對應關係にあるわけである。しかしこのような關係は古今を通じて變らなかったわけではなく、平安時代の訓點資料では、むしろ、返讀する箇所に必ずしも返點を施すとは限らず、返讀に對して返點を施すことはかなり任意であるのが普通であった。

今、返讀と返點との關係を見ると、

1. 返讀に對する、返點の有無
   - イ、全く返點を施さない
   - ロ、部分的に施す（散在）
   - ハ、原則として逐一施す
2. 返讀に對する、返點の施し方
   - イ、返讀すべき最初の漢字にだけ施す
   - ロ、返讀すべき最初の漢字とその返る相手の漢字一字だけとに施す
   - ハ、二回以上の返讀がある時、返讀すべき漢字とその返って行く相手の漢字の二つ以上に訓讀の順序に從って一々施す
3. 返讀の機能の異なりに對する返點の形態の使分け

返讀には、(a)直前の漢字一字だけに返る働き、(b)二字以上離れた漢字に返る働き、(c)一箇所に短い返讀（(a)(b)を含む）と長い返讀とが複合している、等がある。これらの返讀の機能に對して、

イ、どの機能に對してもすべて同一の返點を用いる。

ロ、返讀の機能の異なりに逐一對應しないが、二つ又は三つ程度の返點の形態の異なるものを使分ける。

ハ、返讀の機能の異なりの數に對應して、それだけ異なった形態の返點を用いる。

のような樣々な場合が認められる。

返點の沿革は、このような兩者の關係の、時代的な變更として描き出される。

○返點という名稱について

返點は、平安初期には訓點の一つとして、省画體の假名やヲコト點と一緒に扱われ、いずれも訓讀のための符號であったらしい。返點の書き施される位置や大きさ、その加施の狀態などに省画體の假名と異なる所がないのはこのためであろう。平安中期に省画體の假名が文字として新たな價値を持つようになった時も、返點は殘るヲコト點と同類か又はその近い關係の符號として、いわゆる「點」の總稱で呼ばれる中にあって、特にその中から返點だけを取出してヲコト點と區別したり、分出してその機能や特性を考える必要は無かったようである。

返點が意識されるのは、ヲコト點が實質的な生活力を失なった鎌倉時代以降であろう。平安時代に「返點」に關する名稱が管見に入らないのはこのような事情によるものであろう。

返點に關する最も古い名稱は、ヲコト點を意圖的に集めた所の、點圖集の中に見出される。現存最古の識語を持つ、大東急記念文庫藏の延應本の點圖集は、奥書によると鎌倉時代の延應元年（一二三九）の識語を傳えている。その中の、「圓堂點仁和寺所用」「中院僧正點高野所用」「俗點」のそれぞれの星點圖の左下の點に對して、「返」の稱が与えられている（中田祝夫博士編「古本點圖集二種」による）。但しこの本の書寫は永正十年の轉寫であるから、轉寫に伴なう後補のおそれがなくもない。しかし續く後の點圖集にも同じ稱のあるものがあり、更にはこの稱が「返點」と「點」まで加えられるようになる。これは恐らく、ヲコト點の一つとして、「テ」「ニ」「ノ」「ヲ」「ハ」等を個々のヲコト點が表したのと同樣に、「返ル」ことを表す稱であったものが、次第に一つの獨立した名稱となり、ヲコト點とは區別して意識されるようになったことを反映するものであろう。

「返點」の名稱が、點圖集以外で使われたのは、桃源の千字文序（兩足院藏）が早い方であろう。

凡倭人之讀書、非若梵漢之直下諷詠而會之、蓋帶其意自下而反上、謂之返點矣

江戸時代の訓點を論じた書物にも屢々見られる。例えば江村北海「授業編」巻三訓點に、

點トハ古昔ノ「ヲコト點」ヨリイフ事ニテ、今ノ反點ハ點トイフニハナケレドモ因仍シテ點ト云ナリ

とあり、又、貝原益軒「點例」上・總論にも、

凡點例ヲ下スニ五ノワカチアリ、一ニハ倭音ニヨム二ニハ倭訓ニヨム三ニハ出爾波（中略）四ニハ返リ點ナリ是ハ下ヨリカヘリテヨムニ種々ノ差別アリ、一ニ三の返點アリ、レノ返點アリ、上中下の返點アリ、甲乙丙丁ノ返點アリ、五ニハ竪點

とある。

尚、「カリガネ點」の名稱については、桂庵和尚家法倭點の「カリガネノ點ノコト」がよく知られる所である。

〔注1〕華嚴刊定記の返點については、既に、中田祝夫博士「古點本の國語學的研究」譯文篇の解題、大坪併治博士「訓點語の研究」の中「反點の發達」に説かれている。

〔注2〕華嚴刊定記では句點は漢字の眞下に施し、讀點を漢字の左下に施して區別している。讀點はそこから上に返讀する漢字に施される場合もあるから返點の働きを兼ねたとも考えられるが、讀點は返讀しない箇所にもあるので、姑く返點から除くことにした。

〔注3〕梵網經巻上の句讀點は、句點を漢字の右下に施し、讀點を漢字の眞下に施して區別している。

〔注4〕大坪博士は前掲論考において、「星点の反点」「数字の反点」「記号の反点」「文字の反点」の四種に分けられた。この名稱は、返點の沿革を考察するのに有効であるので、本稿でも踏襲させて頂き、院政末に現れたと見られる「雁點」を加えて五分類とし、併せてその名稱等を一部改めた。

二、形態から觀た返點の變遷

前節に述べたように、返點の形態にはA・B・C・D

三〇三つに分類される型がある。これらが一様に平安初期から今日まで用いられたわけではなく、形態によっては、使用された時期に偏りが認められるものがある。即ち、Dの記號の返點は、主として平安初期に用いられたものであって、後世は用いない。又、Eの雁點は院政末期に現れ鎌倉時代以降に盛んに用いられている。反對にAの星點の返點は、ヲコト點と運命を共にし、ヲコト點の一般に衰滅する鎌倉時代以降は次第に用いられなくなる。但し平安時代にも資料によって用い方に差がある。

従って、形態の上からその使用時期を區分すると、次のように三分される。

第一期　記號の返點を使用した時期（星點の返點も使用）

第二期　記號の返點を使用しなくなり、又、雁點も未使用の時期（星點の返點は使用する群と使用しない群とがある）

第三期　雁點を使用した時期（星點の返點は一般には使用せず）

第一期は平安初期、第二期は平安中期から院政期まで、第三期は鎌倉時代以降となる。（各期の境界については後述のように、それぞれの返點の使用に多少の遅速がある）この時代區分はここでは專ら返點の形態から行ったものであるが、次節に述べるように返點の使用狀況からも密接な關係がある。

この區分は、特定の時期に偏って用いられた返點を目安としたものであるが、返點の中には、どの時期にも用いられた所の、Bの漢數字の返點、Cの文字の返點もあるのである。

以下、各時期の返點について、その時期ごとに、先ずそれぞれの時期の特徴となる返點について説き、次に、各時期における資料ごとに使用された返點の諸形態を代表資料によって表覧して補説することにする。（例文中ヲコト點は平假名、假名は片假名で示し、返點は原本に從い私には一切施さない）

第一期　記號の返點を使用した時期（平安初期）

イ．「〻」の例

共往て佛所に稽首佛一足に（白鶴美術館藏大般涅槃經卷六十七　平安初期點　弘仁頃）

徒に以て曜て義に輔け徳を紀して情を括一性すまを（知恩院藏大唐三藏三藏法師表啓　平安初期點）

過去世の无量无邊の劫を有き佛と兩足の尊（天註法華經　化城喩品古點）

この返點を用いているのは管見では、右掲の他には羅摩

伽經古點、白鶴美術館藏大般涅槃經古點卷三、七、十一、阿毗達磨雜集論古點、天理圖書館藏注法華經卷七古點、知恩院藏瑜伽師地論古點、地藏十輪經元慶七年點、石山寺藏大方廣佛華嚴經古點（貞觀頃）があり、西大寺本金光明最勝王經古點には春日政治博士によれば十卷中に一例があるといわれる。

Dの記號の返點の中、イの「⌒」は、後述のように、平安中期に入っても天暦頃までは一部の訓點資料には保存された。即ち、傳統的な南都の聖教、及びヲコト點法が乙點圖を用いる資料であって、前者は聖語藏并中邊論天暦八年點、大乘掌珍論天暦九年點であり、後者は蘇悉地羯羅經略疏寛平二年點、石山寺藏金剛頂瑜伽略出念誦經角筆點、東京教育大學藏（石山寺舊藏）金剛頂三摩地法天暦三年點である。

この返點の起源について、春日政治博士は、文字の上下を誤寫した際に上に置くべき文字に傍記した「⌒」又は「∨」の反符にあり、その例として天平勝寶六年外島院牒並びに天平寶字六・七年以前書寫の大神宮御飾注文にあることを指摘された（「初期點法例」古訓點の研究二六六頁）。これは訓讀とは別であるが、その形態が同一であり、その機能が訓讀における返讀を示すのに流用し易い内容である所から至當の御見解であろう。

ロ、「⌒」の例

如是雖修出離而戀慕父母朝夕難忍（東大寺諷誦文100行）

如瑜伽論の第五十九六十及對法論の第八に廣く說く十惡業道に所の有る果相。（山田本觀弥勒上兜率天經賛朱點）

この返點を用いているのは管見では、右掲の他には願經四分律古點（斯道文庫本・小川本・岩渕本（後二者は大坪博士による））大乘掌珍論承和嘉祥點、石山寺藏瑜伽師地論古點第一種、西福寺藏大般涅槃經卷二十九古點（築島裕博士調査資料による）があり、山田本法華經方便品古點に稀にある。

この記號の返點は、イに對して返讀する相手の漢字をも明示しており、長い返讀において、一字返讀や「一・二」等の短い返讀を含む複合の場合に用いられることが多い。その符號としてイから發達したものであろう。

ハ、「十　十」の例

以て不如實知顚倒して見て故に名爲邪見。（成實論卷十五天長五年點）

如く破て他の說を无礙するが故に常非ぬとのたまふが即能成（名文化）には自无常なり性なりといふを（大東急記念文庫藏百論釋論承和八年點）

この記號の返點を用いているのは他に、飯室切金光明最勝王經注釋古點がある。その働きとしては口に通ずる。

ニ、「○　○」とその變形

菩薩摩訶薩復有能引遍滿虛空无量无邊廣大衆具
（地藏十輪經元慶七年點）

この返點とその變形は地藏十輪經元慶七年點に見え、その實狀については大坪併治博士「反點の發達」に詳しい。

ホ、「、　、　、」の例

二能生果喻す聞きて此の經を見そまりて弥勒經を得るに道果
（園城寺藏弥勒經疏寛平二年點）

大坪併治博士はこの返點が石山寺本瑜伽師地論古點第一種に見えることを指摘された。

ヘ、「＝　＝」の例

能く今智者を處人天
（石山寺藏守護國界主陀羅尼經巻八古點　朱點第一種）

この記號の返點は他に百法顯幽抄古點にもある。

ニ、ホ、ヘの働きは口に通ずるが、資料による差がある。

ト、「□〉□」「□〈□」の例

漢字一字の返讀に用いる記號で、既述のように、東大寺諷誦文に見えるだけである。

四恩中に難報難は窮者不過父母之恩は
（東大寺諷誦文85行）

平安初期は無論、平安中期以降にも例を見ない。個別的な工夫に出たもので、一般には弘まらなかったらしい。

以上の記號の返點は、平安初期に主として用いられたものであるが、この期には他に、星點の返點や漢數字の返點や文字の返點もあり、一資料でこれらを併せ用いている。その様相を主な訓點資料について示すと、次頁の第一表のようである。（表の下方の加點狀況と位置とは次節以下で考察するもので、便宜併せ掲げる）

第一表の補説

1. 返點の中には異なった形態同士が、同一資料内で併用されるものと、併用されないものとがある。

(1) 星點の返點と漢數字の返點とは併用される。

以て散心悔心を故
（成實論巻十五天長點）

時には、星點が漢數字の「一」を代用する。

心常に生疑ことは有解脱
（成實論巻十五天長點）

第一表

	訓點資料	返點の形態 星點	漢數字	記號イ	文字	記號ロ—へ	記號ト（中返讀）	雁點	返讀に對する加施の狀況	加施の位置	備考
第1群	成實論天長五年點	◎	◎「四」アリ	×	×	＋……＋	×	×	散在	右傍	加施の位置は、並記訓や右傍に遵文や假名の書入れがある時は左傍を用いることがある。
	飯室切金光明最勝王經注釋古點	◎	◎「四」アリ	×	×	＋……＋	×	×	散在	右傍	
	百論釋論承和八年點	◎	◎「四」アリ	×	×	＋……＋	×	×	散在	右傍	
第2群	觀弥勒上生兜率天經贊朱點（山田本）	×	◎「四」アリ	⸝。	×	⸝ ⸝ ⸝	×	×	散在	右傍	
	東大寺諷誦文	×	◎	×	×	⸝ ⸝	◎	×	散在	右傍と左傍	
	大般涅槃經卷二十九古點（西福寺藏）	◎	◎「四」アリ	×	×	⸝ ⸝	×	×	散在	右傍が基本左傍にもあり	
第3群	西大寺本金光明最勝王經古點	×	◎「四」アリ	⸝（例）	×	上下	×	×	散在		
	大智度論天安二年點	◎	◎「四」アリ		上下		×	×	散在	左傍	
第4群	弥勒經疏寛平二年點（朱點）	◎	◎（白點二例アリ）	×	×	、……、	×	×	散在	右傍（白點）	
第5群	百論天安二年點	×	×	×	×	×	×	×	×	×	

◎ハ多用、○ハ稀用、×ハ用例ナシ

(2) 記號イの返點「⸝」は、漢數字と併用されうる。又、「⸝」を用いる資料では星點の返點を用いないものが普通である。

(3) 記號ロ—への返點と漢數字の返點とも併用される。

名色繫縛する衆生たちに名色若滅⸝則无ニ衆生一（大般涅槃經卷二十九）

この訓點資料では下の「⸝」は返讀すべき漢字の一つ上の字にある。他の例については、「記號の返點」に掲げた例を參照。

(4) 記號ロ—への返點は、相互には併用されない。即ち「＋……＋」を用いる群には、「⸝ ⸝」「、……、」はなく、「⸝ ⸝」を用いる群には、「＋……＋」「、……、」はない。

(5) 文字の返點としては、平安初期には「上下」のみであって「甲乙丙」他はない。「上中下」の「中」の例も

管見には入らない。

「上下」を用いる資料は第一期には少ない。大坪博士の指摘されるように、西大寺本金光明最勝王經古點のが早い例である。

譬如有人於睡夢中見大河の水に漂と泛り其の身運手を動足を截流を而渡を得ること至彼岸に由彼身心に不懈退故從夢覺已上不見有り水彼此岸別(西大寺本金光明最勝王經古點巻二 29頁)

「上下」の返點と漢數字の返點とは併用する。しかし「上下」の返點と記號ローへの返點とは原則として併用しないらしい。「上下」の例が多くないので確かでないが、機能に共通する所があることがその理由と考えられる(但し、平安初期末になると併用が起るかも知れない)。

2. 以上のように、記號ローへと文字の返點とが併用されない點から分類して、第1群から第5群が得られる。

第1群はヲコト點に同種のもの(第一群點)を用いて同一系統にある訓點資料である。第3群は加點年時が平安初期の後半期に屬する新しいものと見られる(西大寺本の加點期は諸種の點から見て從來より降るらしい)。第4群は、地藏十輪經元慶七年點のような個別的なものもあるが、他は天台宗か又は石山寺關係の新宗派のものに多い。第5群は全く返點を用いないものである。

第一期には返點として諸形態が考案されて樣々に使われ、中には集團の間に符號の使分けなどもあったらしく、一見複雜な樣相を示すが、定着せず、中でも記號ローへの返點は次期に入ると消失してしまう。同じ機能の「上・下」のみが保存される。恰も、假名字體が平安初期の諸種の樣相から平安中期に統一に向うのに似ている。

第二期 記號の返點を使用しなくなり、又、雁點も未使用の時期(平安中期ー院政期)

この期の返點としては、星點の返點と、漢數字の返點、及び文字の返點「上中下」が用いられている。しかしその用い樣には資料による相違がある。

ここでは先ず、各返點の用例を例示し、次に資料ごとの返點の使い樣を、平安中期の訓點資料の代表によって表覽して補説する。

A. 星點の返點

若有持誦する錄の眞言の法を不ることあるも成就せ者當に令て持たしむへし此の經の根本眞言を(蘇悉地羯羅經延喜九年點)

彼介未費合戦之違。（將門記承徳三年點）

これは一文献全巻が星點の返點だけを用い、他の返點を使めない例から取上げたものであるが、普通には漢數字の返點と併用するもの が多い。

星點の返點は佛書には基調をなすものとして盛用されるが、漢籍では「て」と兼用のヲコト點として用いるものであって、返讀だけには使われない。

漢籍で漢字の左下の星點を、返讀と「て」とに兼用することは平安時代は無論、鎌倉時代以降もヲコト點が漢籍に機械的に傳存したものや、「一」の代りをしたものに、引續き用いられているが、漢字の右下の星點を、返讀と「ば」とに兼用したものが、岩崎文庫藏毛詩平安中期點には見られる。

今我不樂。（良ば）日月其除なむ（右下の星點は漢字よりやや離れていて、ヲコト點「ば」とは区別される）

國書の中には星點の返點だけの資料が院政期以後にもある。

待點は喜多院點の點圖と西墓點園城寺所用の點圖とには延應本點圖集には見られる。平安初期には、金剛般若經讃述嘉承四年點の□や石山寺藏華嚴經貞觀頃點の、□□もあったが、點圖集の形のものはこの期には見られる。

B. 漢數字の返點

不憂我家之言（古文尚書平安中期點）

袷芝茄之緑衣兮被夫容之朱裳（漢書楊雄傳天暦二年點）

皆自於朕之德薄而不能遠達也（史記孝文本紀延久五年點）

平安中期から院政期中頃までの漢籍では、漢數字の返點のみのもの（「て」と兼用の星點の返點はある）が普通である。

佛書では右に述べたように、漢數字の返點は、星點の返點と併用されるのが多い。

C. 文字の返點

今猶現置有三門羅漢居巖岫中入滅心定（興聖寺藏大唐西域記卷十二平安中期點）

文字の返點は、大返りの長い返點であって、一つ以上の返讀を挾む複雑な場合に用いることが多いから、殆ど漢數字の返點と併用している。「上中下」の「中」を用いるのはこの期に始まるらしい。大坪博士は、小川本大乘掌珍論天暦九年點の例を早い例として擧げておられる。

第二表

	訓點資料	返點の形態 星點	漢數字	記號イ	文字	記號ロ—ハ	記號ト—ヘ(二字返讀)	雁點	返讀に對する加施の狀況	加施の位置	備考
第1群	弁中邊論(聖語藏)天曆八年點	×	◎	⸝	×	×	×	×	散在	右傍と左傍	築島裕博士調査による
	蘇悉地羯羅經略疏寛平二年點	◎	◎「四」アリ	⸝	×	×	×	×	散在	右傍	
	金剛頂瑜伽中略出念誦經角筆點	◎	◎「四」「五」アリ	⸝	×	×	×	×	散在	右傍	乙點圖
	金剛頂經三摩地法天曆三年點	◎	×	⸝	×	×	×	×	散在	右傍	
第2群	蘇悉地羯羅供養法延長三年點	◎	◎	×	×	×	×	×	散在	左傍	順曉和尚點
	弁中邊論延長八年點	◎	◎	×	×	×	×	×	散在	左傍	
	略述金剛頂瑜伽分別聖位修行法門古點	◎	◎	×	×	×	×	×	散在	左傍	
	蘇悉地羯羅經略疏天曆五年點	◎	◎	×	×	×	×	×	散在	左傍	
	熾盛光佛頂儀軌天曆四年點	◎	○(三例)「三」アリ	×	×	×	×	×	星點は文中には原則としてあり	左傍	叡山點の最古資料
	金光明經文句平安中期點	◎	○(三例)	×	×	×	×	×	星點は文中には原則としてあり	左傍	園城寺藏本
	維摩詰經平安中期點	◎	○「三」アリ	×	×	×	×	×	原則としてあり	左傍	
第3群	蘇悉地羯羅經延喜九年點	◎	×	×	×	×	×	×	散在	散在	
	漢書高帝紀下(石山寺藏)角筆點	◎	×	×	×	×	×	×	散在		
第4群	古文尚書平安中期點	◎と兼用	◎「三」「四」アリ	×	×	×	×	×	散在	左傍と右傍	博士家加點本
	淺書楊雄傳天曆二年點	◎と兼用	◎	×	×	×	×	×	散在	右傍が多し	
第5群	大唐西域記卷十二平安中期點	◎	◎「四」アリ	×	上下 上中下	×	×	×	原則としてあり	左傍	加點詳密、假名多し

しかし、平安中期には未だ全資料には擴がらず、使用例は少ないようである。

平安中期の主な訓點資料について、これらの返點の使用の樣相を見ると、第二表のようである。

第二表の補説

1. 星點の返點は佛家と博士家とで用い方に違いがある。
2. 記號の返點イ「❯」は、既述のように南都の傳統を引くものか乙點圖のヲコト點を使用する資料に偏る。それも天暦頃までである。
3. 文字の返點は「上下」又は「上中下」のみであって、「甲乙丙」などはない。しかもこの期のすべての訓點資料には亘っていない。この「上下」「上中下」は大唐西域記古點の、加點が詳密であることと係るかも知れない。
4. 一字返讀を示す返點は全く用いられない。一字返讀を返點で表すとすれば、平安初期と同じく、星點の返點又は「一二」の返點が用いられる。
5. 以上のような相違に基いて、第1群から第5群に分類せられる。

第1群は「❯」を用いるもので、傳統に引かれたものか乙點圖の資料である。第2群は星點と漢數字とを多用するものとして順曉和尚點を用いる石山寺淳祐とその資がある。この群の中には星點の返點が主であって、漢數字は稀であるものもある。それは表では共に天台宗關係の訓點資料であって、第3群と關係があるかも知れない。第3群は星點の返點だけを用いる群である。天台宗の資料又はこれと關係がある。第4群は博士家の加點資料である。第5群は「上下」「上中下」を用いたものである。

第二期の中では、平安中期とそれ以後の院政期との間に形態上の變化はない。變遷するのは返讀に對して返點を加き施す量が次第に増加する點であるが、これは次節で説く事柄である。

尚、漢數字の返點に屬せしめた「⁙」や「⁘」も院政期には例が拾われる。

二者雖逢可躭完冝不可追着縱云以鞭如等打
⁙ ⁘ ⁘ ⁘ ⁘ ⁘ ⁘ ⁘ ⁘ ⁘ ⁘ ⁘

（高山寺本古往來）

第三期

雁點を使用した時期（鎌倉時代以降）

この期の返點としては、漢數字と文字「上(中)下」とが主に用いられ、星點の返點は保守的なヲコト點を傳存させた資料や漢籍の訓點に殘るが、一方、新たに雁點が、一字返讀を專ら擔うための返點として現れる。

E. 雁點

(1) 初出期の形態

雁點の現存最古の例は、管見によれば、承安二年（一一七二）加點の九條本文選巻二十の中のものである。

夫・擊・鼙・叩レ鼓・彈レ箏・搏レ髀而・歌

しかし雁點は未だ數例のみであって、他は一字の返讀でも「一・二」を用いており、この方が普通である。次いで猿投神社藏古文孝經建久六年（一一九五）點がある。

各從其所レ施　○所レ好……所レ惡

この訓點は承安四年（一一七四）の清原家點本を寫したものであって、親本に忠實であったとすれば、院政末期に溯る。雁點と「一・二」とが二重に施された例が少なくないが、雁點は三十餘箇所であり、一字の返讀の全体から見ると少ない。續いて、明文抄巻四鎌倉初期點の二例、

蘭蕙不同俱爲悅レ目之翫

世俗諺文鎌倉初期點の（丁數は古典保存会複製本）、

見レ妬（三十一丁表）　天道張レ弓（一丁裏）

等や、高山寺藏般本紀建暦元年點（一二一一）の、

乃・興レ師・率諸侯

等がある。

これらの初出期における形態は、「レ」「レ」「レ」であって、第一画の入筆は縱線に近く、それを輕く右に跳ねた形であって、その位置も漢字と漢字との間、ほぼ中央にある。

(2) 鎌倉中後期の雁點

鎌倉中期になると、雁の羽をひろげて飛ぶ形が多くなって來る。その上向きの角度は鈍角であり、羽形も左右ほぼ對稱となる。

莫レ不倫其得失以諸爲レ君之難（群書治要巻一建長七年點）

この形態は以後室町時代まで續く。

(1)から(2)への變形は、恐らく横長の空間からの制約と、起筆の具合が(2)の方が楽なためであろう。

(3) 位置の變改に伴う形態の變容

雁點の位置は、初出期から鎌倉時代を通じて、すべて漢字と漢字との間の丁度中央にあった。これは例外が殆

どない。所が南北朝後期より、室町初期を過渡期として、位置が左寄りに移動し、室町時代には左寄りに定着してしまう。これは加點時期を推定する有力な手掛りとなる。

南北朝後期の資料には、「□レ□」（中央）と「□レ□」（左寄）とが交用されているものもあり、

不レ知レ禮（猿投神社藏論語集解康安二年1362點）

一方、殆ど中央のみの従来の形もあって、

以修レ道之身観不レ修レ道之身（老子應安六年1373點）

過渡期の様相を示している。しかし、室町初期の六臣註文選應永三十四年（一四二七）點では、

有レ道レ詞激一切揆渡其事宅心隠微晦滅

其兆飾レ物反諷假レ時維情

のように、左寄りが主であり、一部に中央のものが残る程度になっている。

室町時代に左寄りに定着するようになると、雁の左の羽は左の行間にはみ出ることになる。これを避けようとすれば、左の羽を小さくするか、縦線にするか、に依らねばならない。後者は所謂「レ點」の形であって、現行の形である。この形は室町中期以降にて、桃山時代には定着したらしい。

○「甲乙丙」の返點について

文字の返點としては、鎌倉時代までは「上下」「上中下」が專ら用いられていた。「甲乙丙」が何時から用いられるに至ったか詳かではないが、老子至德三年（一三八六）點には見出しうる。南北朝後期には用いられたことが分る。

老子・傷時の王・不先レ道レ德レ化レ之而レ先レ形罰レ也

以上のように、本節は形態を中心として返點の時代的相違を見たものである。

三、返讀に對する返點の機能の上から觀た返點の變遷

今日の訓讀では、返讀すべき所には必ず所定の形の返點を施す建前となっているが、平安時代には返讀に對して逐一返點を書き施すとは限らず、かなり任意であった。そこで、前節に述べた五つの形態の返點が、返讀に對して、どのような働きをし又どのような機能上の限界があ

るかを檢討してみよう。

先ず、Aの星點の返點は、返讀すべき最初の漢字しか示さず、返る相手の漢字を示すことが出來ない。これを補うために、「待點」が工夫され加わったが、これでも一度の中繼點を示すだけで、三回以上返ったり、返讀と語順に從う讀み方とが複合したりする時は、それを明示することが出來ない。これを補うためには、どうしても別の返點が必要であって、漢數字などが併用される所以である。次に、Bの漢數字の返點は、返讀すべき最初の字は無論、返る相手も返讀の數だけ何度でも示すことが出來る。數字は自然數であるから何度でも表しうる（實際には三回までが最も多く、四以上六、七程度である）。一字の返讀でも、短い間では返讀と語順に從う讀みとが合さった「四二一三」のような場合も示すことが出來る。しかし、短い返讀と長い返讀とが幾つも複合している場合には、漢數字だけでは同じ數字が隣同士に表れて混亂が生ずるおそれがある。そのためには短い返讀には右傍に施し、長い返讀には左傍に施すとすることもあったが、位置そのものも後述のように變遷するから、この方法にも限界がある。文字や記號の返點を併用しなければならない。次に、Cの文字の返點は、それ單獨では、漢數字の返點と似た働きがあるが、むしろ自然數とは異なって「上・下」か「中」を加えても、四度以上の返讀は示し之ない。しかし實際には、漢數字の返點と併用して複雜な返讀の場合の援けとして使われる。成立事情から見ると、「上・下」だけが使われており、その働きは、記號の返點のロ一へに似ている。次に、Dの記號の返點の中、イの「⌒」は星點の返點と働きが似ている。その欠を補うためロの「⌒ ⌒」を發達させることは自然の勢であろう。しかしこのロも、ハ・ニ・ホ・ヘも「上・下」と同じ限界がある。複雜な長い返讀に、漢數字と併用される所以である。最後に、Eの雁點は、一字の返讀しか示さないが、一字の返讀には、「一二一」が二度の手間で二場所をふさぐのよりも便利である。

さて、以上のように返點にはどの形態にも、働きの上で長所と共に、大きな短所がある。返讀すべき所には必ず返點を施すという立場から見れば、短所であってこの短所を補うためには幾つかの形態の返點を併用する必要がある。しかし、平安時代には、一つの形態の返點しか用いなかったり、併用が有機的でなかったりしている。

それが可能であったのは一体何故であろうか。それは、返讀に對して逐一返點を施さなかったからである。返點を施すのは任意であり、便宜本位であったといえよう。

不應貪著小事以妨大利（成實論天長五年點）

の「大利を」のように返點を施さないことが多く、それ故にこの例文のように「星點」と「一・二」だけで事足りているのである。抑も漢文の讀解力が強ければ、備忘としての訓點は全く必要のないものであって、返點の全くない所の、第一表第5群のような訓點資料もあり之たわけである。返點を部分的に用いる資料でも、場所によっては、

是の五蓋たちは三法は力強きが故に獨の名て爲蓋。（成實論天長點）

のように返點を全く用いない箇所もあるのである。第一表と第二表とで、「返讀に對する加施の狀況」欄で「散在」とあるのはこういう狀態を指し、平安初期と平安中期とではこれが最も普通であったことを示している。

1. 第一期から第二期への變遷

それでは、平安初期から平安中期に返點が變ったのは何故であろうか。具體的には記號の返點の諸種が用いられなくなったことであるが、その多くは複雜な長い返讀を示すもので、働きが「上・下」と通ずる。記號イ「⌋」も働きが星點の返點と重なるから、統一され淘汰されたとも考えうる。その消滅の原因として、(1)同じ働きで二つ以上の異なった形のものは淘汰する。丁度、平安初期の省画體が平安中期に一音節一字母一形の方向で統一され整備されるのと揆を一にする。殘った星點の返點や「上下」は便利で經濟的であり、特に「上下」は「中」を加えれば「⌋」より一回多くの返讀をも示しうる。(2)「⌋」の場合には、文字の顛倒符と同形であり、顛倒符は後世もこの形が引續き使われているので、返點はこれと區別し文字書寫と訓讀とを分化する必要がある。(3)訓讀法が變り、平安中期以降は一文が短く切られる傾向が生じ、平安初期のような一文を長く訓讀することが少なくなったために、複雜な長い返讀用の返點は不要となった、の諸點が考えられる。この中、(1)の「上（中）下」は第二表の示すように、平安中期にはすべての資料に現れるわけではなく、この表ではむしろ用いられることが少ない。從ってこれが主原因とはいえないかも知れな

い。(2)(3)を否定する材料もない。恐らく、これらの諸要因が相互に關聯し合い働いたのであろう。ともかく、記號の返點は、この期には用いなくても通用する狀況であったことが背後に働いている。

2. 返讀に對する返點の增加

平安初中期と院政後半期とを返點の加施の狀態という點から比較すると、院政後半期には返點の量が增加している傾向を知ることが出來る。

礼已(シテ)拳頭(ヲ)忽(ニ)現一老人(ニ)従山中出来(リ)上(佛頂尊勝陀羅尼經院政後期點)

不(ス)苟(モ)取(リ)比(ヒ)周(ヒ)於朝(ニ)以(テ)移(サ)主上之心(ヲ)上(文選巻二十永安二年點)

このように返讀すべき箇所に原則として返點を施すことは、既に平安中期にも一部の資料には見られた。平安初期に比べて平安中期には返點の加施がやや多くなったように見えても、當時は基本的には任意で便宜的態度は變っていない。博士家所用の漢籍は返點の量が少なく漢數字本位であるのに對して、佛書では星點を主調に漢數字等を併用し、量も相對的に多くなるという差があっても、右の基本的態度は變っていない。平安後期も同樣である。

しかし、院政期を過渡として後期以降は返點の量が增加し、次第に「返讀すべき所には返點を施すのを原則とする」という傾向が一般的になる。この傾向は佛書だけでなく漢籍の方にも及ぶようである。返讀すべき所は逐一返點を施す原則が成立すれば、それまでの返點が任意で便宜的であったのと大きく異なってくる。返點の量が增加するに伴って、各種返點の交通整理が必要となろう。即ち、返讀の内容の異なり――一字の返讀と二字以上の返讀、複雜で長い返讀(返讀の複合)――に對應して諸種の返點の用い方を一定にする必要がある。機能の分化を自覺することによって、形態を分析して對應させることが生ずるわけである。

こうしてみると一字の返讀に對してはそれ專用の特定の返點が未だ成立していなかったことも判明する。ここに雁點が成立する基盤が存するのである。東大寺諷誦文の一字返讀の記號は、この資料の個別的なもので、一般化せず、まして平安中期以降にその例を見ない。返點は任意であったという、時期そのものが、一字返讀の專用の返點を必須としなかったからであろう。

返讀すべき所に逐一返點を施す原則の成立を促した力は何であったろうか。單一の原因ではなかったであろう

が、一つ考えられるのは、鎌倉時代以降には、それ以前と比べて、傍訓としての片假名の書入れが詳密になることが指摘されていることである（築島裕博士「興福寺本大慈恩寺三藏法師傳古點の國語學的研究」研究篇）。

併せて鎌倉時代には、漢文を訓讀を通じて受容する層が下向に擴がったことがある。漢籍の訓讀が博士家の手から無名僧に移り、その力によって地方豪族や武士にまで及んだことは顯著な事柄である。

今までよりも、漢文受容者の讀解力が低下し、それを補うために、詳密な訓點を必要とすることは考えられることである。しかし、右の原則の成立には、長い間に時の推移と共に自然にその方向に動くという事情も働いたであろうことを考えねばならない。

3. 雁點の起源

雁點の管見する最古が文選巻二十承安二年點であることは先に述べた。この承安點の返點が右掲のように、逐一返點を施す原則によっているのは偶然ではない。先に述べた雁點の初出期の訓點資料はいずれもこの原則によっている。ただ初出期の實態を見ると、一字の返讀にも「一・二」が用いられて、むしろこの方が基調であり、雁點はその中に少數例を見る程度であって、過渡的な様相を示している。一字の返讀に對して雁點を專用する資料の古いものとしては、史記殷本紀の建暦元年（一二一一）點がある。この頃に雁點の用法が凡そ定着したと推定せられる。

初出期に雁點がどのような場合に現れるかを見ると、世俗諺文鎌倉初期點では、下の動詞等と二字連合度の高い助字「不レ□」「未」「非」「可」「所」等に偏っている。このような特定用法に現れ、そこからも擴まったことが考えられる。

しかし鎌倉初期には未だ雁點を使用しない訓點資料もある。使用した資料と使用しない資料とを整理すると、恐らく、眞言宗僧の一部か博士家の一部（承安二年點の加點者、安紀宗元十八歳は未詳）あたりから出て、徐々に廣まり、鎌倉中期には一般化したものであろう。

雁點の起源については、これまで、(1)文字の上下の誤寫を訂す顚倒符から出たとする説（鈴木一男氏直話）、(2)「甲乙丙」の「乙」から出たとする説（足利衍述氏「鎌倉室町時代之儒教」）がある。東大寺諷誦文の一字返讀の記號と係りのないことは既に述べた通りである。そ

こで、(1)(2)について検討するに、先ず1の顚倒符は、上代から平安時代以降にも引續いて用いられる一方、平安初期には、返點として流用されている。しかし一字の返讀には限らず、形も雁點と異なる上に、既述のように、平安中期を境として返點には用いられなくなったものである。これが後に再び復活する理由が分らない。雁點の現れる時代の風潮としては、後述のように、表記符號が分析的になる方向であって、顚倒符を以て、返點に兼用するのは時代の風潮に逆行することになる。又、假に訓點として平安初期から引續き用いられたとすれば、雁點がもっと早くその用例を見せてもよさそうであるが、管見では、院政末より早い例を知らない。[注1] このような諸點から(1)は目下、從い難い。次に(2)の「乙」字の變形とする説については、「甲乙丙」の返點が平安時代には例を見ず、管見では南北朝の例が古い。假に平安時代に例が現れたとしても、大多數の點本には用いない稀なものであるから、そのような所から一般化することは考え難い。又、形も「乙」と初出期の雁點とは大差があり、位置も何故に上字と下字との真中に施したのか解けず、諸點から見て關聯が認められないのである。

それでは雁點の出自は何であるのか。その起源を考える條件としては、(イ)訓點の符號であること、(ロ)平安初期以來引續き用いられて來たもの、(ハ)漢字二字の連續において上字と下字との關聯があることを示すもの、(ニ)位置が右傍でも左傍でもなく、上字と下字との間の中央にあること、等が擧げられる。このような條件に合う符號として考えられるのは、二字熟合符の縱線「□|□」である。思うに、これを變形させて、縱線の下から右に跳ねた形「レ」とし、これを一字の返點に考案したものであろう。中央の二字熟合符がこの時期には音合を示すものであったから、返點とは機能も別である上に、變形することで原據との區別をはかったのであろう。又、音合符を用いる場合には、訓讀みで返讀することは全くないから、同一空間を占める符號として兩者の衝突することが全くないことも、重要な意味を持つ。初出期の雁點の實狀を見るに、その形が、縱線が基線となり、これを右に跳ねた形であるのは、兩者の關聯を示している。その後の變容については既に述べた所である。

雁點の起源についての右の推定を積極的に證明する材料を持たない。從ってそうでないとする余地もあること

を附記する。

〔注1〕雁點について、陽明文庫藏不空羂索神呪心經古點の「長二寸」が指摘されている（「訓點資料と訓點語の研究」三頁）が、筆者の調査では「長二寸」と讀まれる、「寸」の字音を表す片假名「ソ」であった。

四、返點の位置の變遷

返點を記入する位置は、現行では漢字の左側でしかも漢字の下に本文の漢字よりは小字で書き施すことになっている。しかし、平安初期には第一表が示すように、漢字の右傍の中程に省画假名と同大で記すのが一般的であった。ただ二訓以上を併記したり、右傍に導の文字や假名があったりする時は左側をも利用することがあったし、又、複雑な返讀を示すのに同じ形の返點を右傍と左傍とに使分けて區別するようなこともあったが、基本は右傍であった。これは返點が省画假名と同じく訓讀を示す符號として同列に扱われたためであろう。訓點記入に左傍よりも右傍が選ばれたのは自然の勢であろう。

平安初期も後半期に降ると左傍に施す訓點資料も現れ、中には、「一」は左傍で「二」は右傍としたり、又その逆とする資料（玄奘表啓古點など）もあり、左右が使われることがあった。平安中期には、第二表の示すように、乙點圖使用で「⌋」を傳存させる資料群では右傍が基本であるものもあり、又博士家の加點でも右傍又は左右を使うものがあるが、これらは比較的保守性のある資料である。聖教の、就中天台・眞言の平安新佛教の加點資料では左傍が基本となっている。平安中期には省画假名が、符號から文字として獨立するから、返點は文字とは異なる符號のまま殘され、區別して意識されるようになって、假名とは異なる位置の左側が選ばれたことが考えられる。中でも、假名による加點が詳密な資料で、返讀も多く施される場合に左傍が專用されるのは、右傍には空間がないという物理的制約も働いたであろう。

院政後半期以降に、假名の書入れが詳密になる傾向が生ずると共に、返讀すべき所は逐一返點を施す原則が生ずると、假名と返點との位置を右と左とで區別することは一層必要となったであろう。しかも、返點が返讀の機能の異なりに對應して各種の形態を分業させ、用法を定着させることになれば、返點は左右の空間を使わずとも、

左側の一方だけでその役目を果すことが出來たはずである。

「返點は左側に施す」という習慣とその意識が固定すれば、雁點も、その成立時期がおくれ成立事情が異なって他の符號に原據を持つとは言え、一度、返點として仲間入りし、返讀機能の分化の一端を擔うようになった以上、他の在來の返點と同樣の位置に移動する契機は十分にあった。その上、漢字と漢字との空間には、假名等の書入れは原則としてなく、雁點の位置が中央であっても左寄りであっても、いずれも空白の場所であるから、中央から左寄りに移動しても他に影響する所はなかったことも、左寄りを可能にする力となったであろう。

所で返點の記入位置が左側に統一された場合、その位置を仔細に見ると、平安・鎌倉時代を通じて左の中程が普通であった。しかしそれが次第に左下方に移動して來た。現行の位置に定着した時期は明かでないが、先掲（甲乙丙の例として擧げた）の老子至德三年點の返點は、左下に施され現行に近づいている。南北朝後期にはその傾向にあったかも知れない。位置が左から左下に移った理由として、(1)當初、返點はヲコト點と同列に扱われたが、鎌倉時代以降、ヲコト點が次第に用いられなくなり、片假名に代って行く間に、言葉を表す片假名に對して、符號に過ぎない返點には、目立たないような位置を與える氣持が働いた。(2)雁點の左寄りの位置が、返點全體の新しい位置として暗示を與えたかも知れない、ということが考えられる。その邊の事情を語るものとして、桂庵和尚家法倭點の、

カリガネ點ノ事。イカニモ本字の點畫ニマギレヌ樣左ニヨセテ點スルナリ。二字三字乃至五六字マデモ下ヨリ讀ミノボセバ可用雁金也。不可用一二點。雖三字中于於等ノ置字有之、可用一二之點。其一二上又讀ノボスル字アラバ可用上下之點。（例略）上下上猶讀ノボスル字アラバ可用甲乙點也。

が參考となる。このような自覺が何時まで溯るか尚檢討を要するが、桂庵の主張が、その後の訓讀の世界に大きな影響を持ったことからすれば、このような仕方が規範となり、今日の返點の直接の源となっていると思われる。

五、結びにかえて

返點は、漢文訓讀における訓點施入の一として訓點の

始まって以來その役割を果して來た。現存の多量の訓點資料によって觀察すると、そこに沿革が認められる。これを形態と返讀機能との相關の上から眺めたが、その變遷を掌る原理は、(1)一つの働きに二以上の異なった形態が生じた時、一形態に淘汰されることと、(2)機能の分化を自覺することによって、それぞれに對應する形態を分析的に與えること、と考えた。前者は平安初期の記號の返點の消滅に、後者は雁點の成立とその時期の狀況とに集約される。

同樣の現象は他の符號の場合にも認められる。その一は、合符である。初期の訓點資料では「□ー□」が音合と訓合とを表すものがあった。未分化の狀態にあったわけである。これが次第に、音合は「□ー□」、訓合は「□ー□」に分化し、これが定着するに至った（家法倭點參照）。

その二は、「ン」の音符である。院政期には、今日いう促音（t入聲も）と舌内の撥音（n尾子音も）とに當る音價を表すのに用いられた。これが二つの音の區別の自覺と係り、形態も促音は「ツ」（又は「つ」の變體假名か、その小書）で、撥音は「ン」の變形「ン」で表すように分化した。この現象は返點の先述の「原則」成立と期を接する。

返點の沿革において見られた現象も、同樣に、日本語の表記史上の注目すべき原理の現れと考えられるのである。

〔附記〕本稿は、昭和四十四年十月二十四日の訓點語學會（福井大學）で發表した内容に加筆したものである。（昭和四十八年九月十日）

本稿の淨書は、松本健二氏の大きな御力によって成ったものである。ここに厚く御禮を申上げる。